

まえがき

この度、名古屋大学加速器質量分析計業績報告書第12号を刊行する運びとなり、ご協力いただいた関係各位に深く感謝の意を表す。本報告書は、名古屋大学年代測定資料研究センター（以下、年測センター）が自己点検・評価事業の一環として毎年開催している“タンデトロンシンポジウム”の講演内容を中心にまとめたものである。10年時限の最後の年に当たる今年度末のシンポジウムは平成12年2月18日（金）に年測センターで開催され、約90名の参加者があった。講演総数は17で、15件の口頭発表と2件のポスター発表が行われた。ポスター発表は会場入口近くの廊下を利用して行われた。

約3年にわたる文部省当局との折衝の結果、年測センター（Nagoya University Dating and Materials Research Center）は、年代研究を行う年代測定総合研究センター（Nagoya University Center for Chronological Research）と、資料研究を行うとともに社会とのインターフェースとしての役割を担う大学博物館（Nagoya University Museum）へ発展的に改組されることとなった。この年代測定総合研究センターは2010年3月末までの10年時限の施設であり、タンデトロン加速器年代測定装置を駆使した ^{14}C ・ ^{10}Be 年代研究とともに、CHIME法やK-Ar法による年代研究も幅広く行っていく計画が立てられている。次の10年時限をクリアするためには、新たな年代測定法を開発しつつ国内外から高く評価される研究成果を上げる必要があり、関係各位のこれまで以上のご支援をお願いしたい。

名古屋大学年代測定資料研究センター長
足立 守